

出三藏記集失訳雜經錄をめぐつて

杉 山 龍 清

大藏經中に収められている漢訳經典はすべてがその訳出者が確定あるいは推定されている訳ではない。多くの經錄においてその訳出者を確定できず、ついに失訳のまま、今日に到っている經典も誠に多い。さらに訳出者の名を記載しているものの、實際にその人物によって訳出されたのか否か、甚だ疑わしい經典も少なくないのである。このような失訳經典、あるいは訳出者の選定、確定に疑問の残る經典類の中で、特に問題のあるのは一卷本の經典であると考ええる。というのは、これらの經典がすべてインドに原典を持つ經典であるとは到底考えられないからである。そこで、これら一卷本失訳經典について、經錄の記述を参考にしつつ、一卷本の成立、訳者の有無についての基礎的考察を為してみたいと思う。

一卷本經典が最初に記載された經錄は、現存するものでは梁代の『出三藏記集』『新集続撰失訳雜經錄』が最初である。この目録は有經錄と無經錄とに区別されており、有經錄は僧祐が實地にその内容を検分することを得た經典、無經錄は僧祐が依用したそれ以前の經錄に記載され、僧祐自身は未檢分な經典の名称を収録したものである。今問題とするのは有經錄の方であるが、これに関する僧祐の序文の要旨を記せば以下の如くである。

「私、僧祐は多くの經典を集め合わせ、諸々の經錄を遍く閱し、新たに失訳經典を撰び定めたいと考えたが、（實際に調査してみると）經卷部数がまことに多いだけでなく、その名称と内容とが紛れもつれて錯綜し、本来のところを解明することがはなはだ困難である。例えば、一つの經典で數種類の名称を伝え保っている場合もあり、或いは同じ名称であるのに内容の異なる經典が幾つも存在する場合もあり或いはまたみだりに不必要な文字を加えたために言葉が入り交つて實際の内容と想像とが異なる場合もあり、或いはその逆に本来の名称の一部を採って題名とし、文字を省いているために内容との相違が生じる場合もある。そこで、その謝りを正そうとして何年かを費やし、ようやくその後には經名を定めたのである。〈中略〉また一卷からなる經典が五百部はど存

在する。これらの經典は概ね、あまたの經典から抄出したものであり、全訳されたものはほとんど存在しない。その抄出されたところの出典を調べてみると、多くは阿含經、六度集經、道地經、大集經、出曜經、賢愚經、譬喻經、生經などから出ている。どれも品の一部を分割し、偈頌を断ち切り、省略して意味を取り、強引に經名を製作してなったものである。その誤りを正そうと考えたが、今はその過ちを大いなる戒めとして、元の經典名を注記することにした。その源を探れば、大本の經典は自ずから知られるであろう。これらの抄出經典が巷に流布してしまった原因は、漢魏の時代の經錄はすでに失われ、二秦・涼代の經錄は訳者の撰号を省き、晋・宋の時代に至っても、この点をゆるがせにしたためである。訳出者の名が欠けているのはおそらくこれに由来するものであろう⁽¹⁾。

以上の記述によって知られることは、僧祐は「失訳雜經錄」に記した一卷本失訳經典を大部の經典とする抄出經典であると判断したということである。抄出經典であると判断したにもかかわらず、これらの一卷本經典を失訳經典錄中に収録した理由は、まず僧祐が資料として用いた經錄において、これらの經典が失訳經典として扱われていたがために、僧祐も結局はそれにならったということ、またそれが誤りだと理解したものの、「その過ちを大いなる戒めとし」たからではないかと推測される。

出三藏記集失訳雜經錄をめぐる（杉 山）

序文で述べられているように、「失訳雜經錄」には長阿含經、中阿含經、增一阿含經、雜阿含經、生經、出曜經、六度集經、または方等大集經といった大部の經典から抄出されたとの記述を含む一卷本經典が多数収められている。この出典に関する記述の多くは費長房や智昇などによっても是認されている⁽²⁾。ただし、これらの一卷本經典の中にはすでに失われたしまった經典も多く、これについてはその經名のみを手がかりとして、出典を調査しなければならないが、これは容易には決定されないものである。さらに失訳雜經錄全体では出典の記されていない經典の方が量的には多く、このような經典についての考察も同様に困難である。そこでこれらの一卷本を含めて失訳雜經錄全体に関する総合的な考察がなされなければならないが、今回は出典の記されている一卷本の中から、特に僧祐が「出生經」と註記した一卷本經典類、すなわち、生經中から一卷本として別行していたと考えられる經典類をモデルケースに若干の考察を為してみたい。この經典を選んだ理由は第一に僧祐が「抄」という語を用いずに「出生經」と述べていること、第二に生經中の説話名のひとつが失訳雜經錄中に一卷本として見いだせることによる。とはいえ、「失訳雜經錄」に収録された經典はすでに失われたものが多いので、両者の經名（説話名）の一致を内容にまで及ぼせるのは無理である。唯一の手段として『出三藏記集』とほ

ば同時期に編纂された『経律異相』中に引用された經典の中から、該当する一卷本を取り上げ、その内容と生経とを比較する方法が残るのである。

『経律異相』に引用された説話の内、『生経』中の説話と内容のものは十九を数える。⁽³⁾にもかかわらず、理由は不明であるがこのうちの十二説話が出典として『生経』を挙げずに一卷本經典名のみを記しているのである。その出典名を以下に挙げておくと、「那頼経」「分衛比丘経」「鼈獼猴経」「五仙人経」「壘狐鳥経」「弟子過命経」「五百幼童経」「俱薩国鳥王経」「蜜具経」「孔雀経」「仙人撓劫経」「夫婦経」⁽⁴⁾である。今回は紙面の都合上、この十二の經典の中から、『経律異相』(巻代十九、正藏五三、一〇七)「比丘失志心惑乱」として収録されているに説話について述べておく。出典は「分衛比丘経」とされているが、この經典は『生経』巻一「分衛比丘経」に相当する。両者の内容と関係は以下の如くである。分衛の比丘が姪女の家で布施を受けた後、姪欲の心を生じ、重ねてその宅を訪問するが、姪女に拒絶される。このことについて世尊が、前生において比丘は鼈(水亀)であり姪女は獼猴であったことを説き、その鼈と獼猴の間にも今世の如き因縁があったと説く。この前生譚の部分が一巻本『分衛比丘経』では全て割愛され、さらに生経において姪女の前生としての獼猴の説く偈が、一卷本『分衛比丘経』においては今世

の姪女の偈として説かれる。⁽⁵⁾以上が両者の関係であるが、『経律異相』に引用されたこの説話が梁代に存在した一卷本『分衛比丘経』全文であるとするならば、まさに僧祐が序文で述べた「品を切りとり偈を裁り、撮略して義を取る」と記したその実例を見ることができるのである。

このように「失訳雜經錄」中に記載されている一卷本經典のいくつかは大部の經典からの抄出經典であるとする僧祐の記述は一応は確認することができる。しかし『出三藏記集』以後これらの一卷本失訳經典の多くは、『法経錄』、『仁寿錄』、『静秦錄』等の衆経目錄を経て『歴代三宝紀』に至り、安世高、支謙、竺法護、鳩摩羅什、求那場陀羅、聶道真、釈慧簡、法炬、安城侯京声等の翻訳家の名を冠せられていくのである。当然この中には誤った翻訳者が選定されている。これらの総合的な考察はさらなる課題としたい。(註省略)

〈キーワード〉失訳雜經錄、一卷本失訳經典

(立正大学仏教学部助手)